

2016年1月3日礼拝メッセージ

聖書：第一ヨハネ4章7～21節

説教：ここに愛がある

1 「兄弟を愛すべきです」(21節)

1) キリストの命令

21節に、「神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています」とあります。私たちは、学校や職場でも毎日のように命令され、言われた事を守るようにと一生懸命努力してきました。教会で少し楽になりたいと思ってやってきたら、新年最初の主日礼拝で、いきなりこんな命令を聞かされ、うんざりするのではないのでしょうか。

また、20節もそうです。「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。」このなかの、「兄弟を憎んでいるなら」という箇所が心に刺さってきます。

2) 愛せない、赦せない

人を憎んだことがない、という方はまずいないでしょう。長く生きていけば、人から裏切られる、だまされる、ねたまれる、身に覚えのないことで強く非難されるということが起きてきます。最近では、仲間はずれとかいじめということが大きな問題になっています。自分に責任があつてそれでいじめられるというのなら、まだ納得できるかもしれませんが。しかし多くの場合はそうではありません。もっと複雑です。

私は、ある親戚からこう言われたことがあります。「あなたが学生だったとき、あなたのおかげで私たち家族はどんなに大変な思いをしたのかわっているんですか。」もう四十年近く前の話なのに、いまだに会うたびに

言われています。確かにそのとおりです。迷惑をかけたことは事実です。でも今になって、そのことを言われても私にはどうすることもできません。相手は私に複雑な思いを抱えたままです。私も同じです。その人を愛するとか、その人を赦すとかとてもできそうありません。

どうしてこうなってしまうのでしょうか。世の中が悪い、運が悪い、相手が悪いというのでしょうか。人を責めることは簡単です。では自分は悪くはない、被害者だというのでしょうか。いいえ。もし人を赦せないでるならば、それは自分の問題なのだということです。

3) 「私たちに負い目のある人たちを赦しました」

主の祈りの中に、「私たちも私たちに負い目のある人たちを赦しました」という箇所があります。「負い目のある人たち」とは、私にひどいことをした人たちと言い換えてもよいでしょう。私は何人もの方から、主の祈りの中で、このことばだけは大きな声で言えなくてもごもごしてしまうとか、赦していない自分に嘘をつくことになるので、ここだけ黙ってしまうというのを聞いたことがあります。

理不尽な理由でひどい目に遭わされても、たとえこちらを赦そうとしない相手でも、とにかくまず自分から相手を赦し、愛すべきである。頭ではわかっています。けれども、心がついていきません。どうしても相手のことを赦せません。憎んでしまいます。いつも心

がとらわれています。どうにもなりません。これが私たちの現実です。そうしますと、私たちは偽り者ということなのでしょうか。そんな人は愛のない者で、神がわかっていないと切り捨てられるのでしょうか。

2 まず神が私たちが愛してくださった

1) なだめの供え物となられた

こんなときは、スタートラインに戻って考えたほうがよいでしょう。スタートラインは、9、10節です。「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちが愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」

まず、神が最初に私たちが愛して下さった。その神の愛はどのようにしてわかるのか。神のひとり子を世に遣わして下さり、私たちの罪のためのなだめの供え物となった。すなわち、十字架でいのちを捨てて下さった。それが神の愛である。

もし私たちがだれかを憎んだままなら、人を赦すことができないのですから、罪を犯していることになります。神に敵対していることになります。どうするのですか。どうにかできるのなら、とっくにしています。できないからみな困っているのです。神はそのことをご存じです。知っているだけではない。この方が私たちのところに来て下さり、私たちの代わりに罪のためになだめの供え物となりました。それが十字架です。神の愛はどこに行けばみることが出来るか。十字架を見てください。

2) 私たちが敵であったときから神は愛した

神が罪人である私たちが愛して下さったと言うと、こんな質問をされることがあります。「まず自分が良い人にならなければ、神は愛して下さらないのでしょうか？」違います。神の前で、良い人などひとりもいません。牧師はいい人だと誤解する方もいますが、先ほども言ったとおり赦せない思いを抱えている訳ですから悪い人です。悪い人間なのに、神は愛して下さったのです。神の敵であるのに、神はご自分の敵である罪人を愛し、敵のためにいのちを捨てて下さった。それが神の愛だと言っているのです。それが十字架だと言っているのです。

3 神の愛が全うされる

1) 私たちの努力によるのか?

これが私たちのスタートラインです。では、21節の「神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです」とどう考えるべきか。これと関連する12節に目を留めます。「もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。」この文章は文としてはそれほど難しくはない。しかし、よく考えると意味がわかりにくい。

皆さんはこれを読んで、こう思いませんでしたか。「神の愛が全うされるために、私たちは互いに愛し合うべきである。言い換えると、私たちが互いに愛し合わなければ、神の愛は全うしない。私たちは、神のためにもっと努力するべきである。」

性格が努力型の方は、おそらくこういう思考パターンになると思います。「神は私たちが互いに愛し合うようにと努力することを求めておられる。」何となく納得してしまい

そうです。でも落ちこぼれクリスチャンは、「私は努力は苦手だ」と言いたくなります。そもそも、私たちが努力しないと神の愛が完全なものにならないのでしょうか。そこが疑問です。神の愛はそんなに力がないのでしょうか。

2) 神の愛の力

そんなはずはありません。神のひとり子がいのちをお捨てになって示してくださった神の愛です。私たちの想像をはるかに超えた力を持っているはずではありませんか。人間の努力という助けがなければしおれてしまうような、そんな小さなものなのでしょうか。

イエスがこう言われたのを思い出しましょう。「神の国は、人が地に種を蒔くようなもので、夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知りません。」(マルコ4章26、27節) 神の愛とは、この種のようなもので、一度畑に蒔かれたら、人が何もしなくても成長して実を結んでいく。それほど力があるのです。

そうしますと、1、2節はどういう意味になるのでしょうか。人間の努力によるのではないはずです。私は、このように言い直すことができます。「神の愛が力強く働いて、私たちは互いに愛する者へと変えられていきます。そうして神の愛は私たちのうちに完成されるのです。」

3) 御霊を与えてくださった

本当の自分は、憎んではならないと知りながらだれかを憎んだままです。とうてい、互いに愛し合う者になるとは思えません。どうしてイエスは主の祈りを祈りなさいと言わ

れたのでしょうか。誰かを赦していない自分に目を留めさせるためです。愛せないという自分を自覚させるためです。どうしてそんなことをさせるのでしょうか。

神の愛はどこに行ったら見えると言いましたか。十字架だと言いました。十字架にはだれがいますか。私たちの罪のなだめの供え物となられたひとり子である主イエスがおられます。なぜこの方は十字架につるされたのですか。私たちが誰かを憎んでいる、誰かを赦していない、その罪のためです。

もし今朝、私たちが主の前で「私はあの人を赦せません。あの人を憎んだままです」と告白するなら、何が起ころうでしょう。私たちは何を見ることになるでしょう。神のさばきですか。いいえ。神が私たちをすべて赦して下さい。いのちを捨てても私たちを救おうとされる神の愛を見ることになります。

その愛が、やがて私たちを変えていきます。何度も言います。自分で変えるのではありません。そんなことはできません。ただ神の愛が私たちを変えていきます。

そうしますと、私たちは何をすることになるのでしょうか。私はがんばりました、という話をするのですか。いいえ。私は、どんなに努力しても人を赦せない者です。そのように主の御前に告白するだけです。それで何も起きないと思いますか。告白する者に御霊が働きます。御霊を通して神の愛が働いていきます。そのようにして神が私たちを変えてくださいます。嘘だと思いませんか。いいえ。私は、皆さんがこのように変えられてきたのをこの十三年間見させていただいたのです。聖書に書かれているとおりでした。そのことを私は皆さんから教えられました。だから確信を持って伝えるのです。

この一年も、神の愛をいただきながら歩ん
でまいります。